

# Candrakīrti 『五蘊論』における諸問題

池田練太郎

## 1 はじめに

現存する仏教文献のうち法相を体系的に、かつ簡潔に整理した文献の多くは、説一切有部 (Sarvāstivādin) の系統のものや<sup>1)</sup>、あるいはその流れを汲む唯識派 (Vijñānavādin) のもの<sup>2)</sup> であるといえるであろう。しかるに、今ここで取り上げようとする Candrakīrti (Zla ba grags pa 月称 c. 600–650) の *Pañca-skandhaprakaraṇa* (『五蘊論』=以下 *PSP*(1) と省略)<sup>3)</sup> は中観派に属する論書であり、まさに諸法の整理を目的とした、中観派の文献としては極めて特異な論書といえることができる。この論書は中観派の論師である Candrakīrti の現存する著作のうち<sup>4)</sup>、註釈書などの類を除いた独立の論書として注目されてよいものの一つである。瓜生津隆真博士は、こうした観点から *Madhyamakāvātāra* (『入中論』) とこの論書を Candrakīrti の著作中の“重要な独自の論書”として挙げている<sup>5)</sup>。けれども、*PSP*(1) については、これまでに瓜生津博士<sup>6)</sup>・山口益博士<sup>7)</sup>、Lindtner氏<sup>8)</sup> 等によってそれぞれ論文が発表されてはいるものの、纏まった成果は必ずしも多いとはいえない。

筆者は中観派の文献や思想については不案内であるから、その内容について詳細に、しかも的を外さずに論ずることは困難であると自覚しているが、それにも関わらず、敢えていまこの論書を取り上げたのは、まさに先に述べたように、この論書が主として法相を整理し、法体系を明らかにすることを目的とした論書だからである。

*PSP*(1) は、後述するように、著作者の全くの独創によって生み出された論書ではなく、先立ついくつかの論書を参考にして著わされたと考えることができる。そのなかでこれまでの研究によって関連を指摘されている論書が二篇ほどある<sup>9)</sup>。

それらはすなわち、

1) Vasubandhu（世親，400-480）：*Pañcaskandhaprakaraṇa*（『大乘五蘊論』＝以下PSP(2)と省略)<sup>10)</sup>

2) *Prakaranābhidharmāvatāra*（『入阿毘達磨論』＝以下PAAと省略)<sup>11)</sup>の二論書である。

また、瓜生津博士は、これに加えて、

3) Vasubandhu：*Abhidharmakośabhāṣya*（『阿毘達磨俱舍論』＝以下A KBhと省略)<sup>12)</sup>

との関連をも指摘されている<sup>13)</sup>。

PSP(1)は、前述のように、Candrakīrtiの思想を考察するうえでも、また、中観派の法相を知るうえでも重要な論書ということが出来る。しかし、実際にこの論書を調べてみると、種々の問題が存在することに気付くのである。

そこで本稿では、PSP(1)について解題的な解説を付しつつ、それとともにこの論書に纏わるいくつかの問題点について考えてみたい<sup>14)</sup>。

## 2 名称について

PSP(1)のサンスクリット語の正式名称は現存サンスクリット語文献からは確認できない。本稿で用いている*Pañcaskandhaprakaraṇa*という名称もチベット大蔵経の中観部(dBu ma)に収められているチベット語訳中に見られる題名、すなわち、

*Pa ṅtṣa ska ndha pra kā ra ṅa* (273b6)

から採ったものである。チベット訳の同じ箇所には、

*Phung po lnga'i rab tu byed pa*

という訳語が付されている<sup>15)</sup>。

この語は先に掲げた、チベット大蔵経・唯識部(Sems tsam)所収のVasubandhuのPSP(2)とまったく同じであり、ふたりの生存年代やVasubandhuの知名度などから考えてCandrakīrtiがVasubandhuのPSP(2)の存在を知っており、それを意識してPSP(1)を著わしたと推察するのが自然であろう。

もっとも、この問題は、著者の意識とは別に、後の中観派の論師たち、あるいはチベットの仏教者たちによって明確に表現され、PSP(1)の一般的な呼称も変化していった。すなわち、*Madhyamakaratnapradīpa*（『中観宝燈論』＝以下

MRP と略す)に“*dBu ma phung po lnga pa*” (? *Madhyamakapañcaskandhaka*, 『中観五蘊論』)と述べられ<sup>16)</sup>, また, チベット大蔵経 Peking 版の dKar chag における PSP(1) の当該箇所“*dBu ma'i phung po lnga pa*”と記されている<sup>17)</sup> ことなどからも, このことが知られる。この「中観の五蘊論」という表現については, 次に著者の問題を考える際に考察することにした。

### 3 著者について

PSP(1) が Candrakīrti の著作であるということを正面から疑問視して論じた研究は, これまでのところ現れていないようである。実際 Candrakīrti 著作説を覆すほど有力な資料を提示することは, 極めて困難なことに違いない。しかし, 従来ほとんど疑われることのなかった, Candrakīrti 著作説を裏付けているとされる根拠を, もういちど検討してみることは決して無駄な作業ではないように思われる。というのは, それらには思いの外不確定な要素も多く含まれているからである。

しかし, 結論から先に述べてしまえば, そうした検討によって必ずしも PSP(1) の Candrakīrti 著作説を否定し去ることはできない。ただ, PSP(1) を直ちに Candrakīrti の著作と決めてかかることを躊躇させるような, いくつかの要因を提示しうるのみである。それによって, 今後この論書を扱う場合に, 著者の問題を考慮に入れて考察する必要性を指摘する意味で, 以下に些か論じてみようと思うのである。

まず最初に, PSP(1) が Candrakīrti の著作であることを確認するために Lindtner 氏が提示した根拠を以下に掲げ, それに対してできる限り批判的な観点から, 逐次検討を加えてみよう。氏は次のように, PSP(1) について, 客観的基準 (external criteria) と主観的基準 (internal criteria) との二つの立場から, それぞれ 5 箇条と 3 箇条の論拠を挙げている<sup>18)</sup> が, いまここでは, 客観的基準の 5 項目を中心にして考察してみよう。

#### a) 客観的基準

- 1) [あらゆる校訂版の] チベット語翻訳の colophon が Candrakīrti (Zla ba grags pa) のことを著者であると述べている。
- 2) *Madhyamakaratnapradīpa* には, 著者の名前に言及した引用文が見られる。

- 3) Atiśa の *Bodhimārga[pra]dīpapañjikā* における Candrakīrti の著作のリスト [には *PSP*(1) が挙げられている]。
- 4) 典拠についての言及はないが、Jayānanda の *Madhyamakāvatāra-ṭikā* には *PSP*(1) からの引用が存する。
- 5) *PSP*(1) の最後の韻文のなかで、著者が自らを Candrakīrti と呼んでいる。

(a-1) *PSP*(1) の末尾には Candrakīrti の著作であることが明記されている。Peking 版の記述を一例として引いておく。

*/Phung po lnga pa zhes bya ba'i rab tu byed pa slob dpon Zla ba grags pas mdzad pa rdzogs so// (305b3-4)<sup>19)</sup>*

また、*dKar chag* にも類似の記述が認められる。これも Peking 版のものを引用しておく。

*slob dpon chen po Zla ba grags pas mdzad pa'i dBu ma phung po lnga pa<sup>20)</sup>*

いずれにしても、こうしたチベットにおける伝承による限り、*PSP*(1) の著者を Candrakīrti であることに疑問を抱く余地はない。また、この「中観五蘊論」という言い方については次の (a-2) で論ずる。

(a-2) *Madhyamakaratnapradīpa* (=MRP) に見られる引用とは次のものである。

*/slob dpon Zla ba grags pa'i zhal nas/ dngos po ni gnyis te/ gzugs can dang/ gzugs can ma yin no//gzugs can ni gnyis te/ 'byung ba dang/ 'byung ba las gyur pa'o//gzugs can ma yin pa'i chos ni gnyi te/ 'dus byas dang/ 'dus ma byas so//'dus byas kyi chos ni gsum ste/ sems dang/ sems las byung ba dang ldan pa ma yin pa' o/ / 'dus ma byas kyi chos ni bzhi ste/ so sor brtags pa'i 'gog pa dang/ so sor brtags pa ma yin pa dang/ nam mkha' dang/ chos rnam gyi de bzhin nyid do zhes gsungs mod kyi/...<sup>21)</sup>*

*PSP*(1) の該当する箇所 (286a3-7 ; p. 19, ll. 8-16) は、たしかに上記の引用文とほぼ対応すると見做してよいであろう。インド撰述の *MRP* に *PSP*(1) が引かれているわけであるから、その意味で、この文は Candrakīrti の著作であることを裏付ける証左となるであろう。

しかしながら、問題はむしろ *MRP* そのものか、あるいはそのチベット訳にあるのではなからうか。チベットの所伝で Bhavya 造といわれるこの論書は、山口益博士の研究によって *Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛitti* (『般若燈論』), *Madhyamakahrdayakārikā* (『中観心頌』), *Madhyamakahrdayavṛttitarkajvālā* (= *TJ*, 『中観心頌註思挾焰』) 等を著わした Bhāvaviveka (or Bhavya, 清弁, c. 490-570) とは別の人物の著作であるということが論証されている<sup>22)</sup>。

Candrakīrti は *Prasannapadā* において Bhāvaviveka を批判しているが、*MRP* の著者 Bhavya はそれとは逆に Candrakīrti を高く評価している。すなわち、前者の場合とは、ふたりの生存年代と思想的立場が逆転していることになってしまう。しかも *MRP* 中には Candrakīrti によって批判される Bhāvaviveka よりも後代の Dharmakīrti (法称, c. -650-) の名も見られるので、この場合、上記の論書を著わし、Candrakīrti によって批判された Bhāvaviveka と、*MRP* の著者とされる Bhavya とは異なる人物と考えるべきであることになる。以上が山口博士の説の要点である。

ところで、*MRP* には、先に示したように、“*dBu ma phung po lnga pa*” という表現がみられる。その前後を含む *MRP* の文を示すと、

/’di’i don rgyas par slob dpon Zla ba grags pa’i zhal snga nas  
mdzad pa’i *dBu ma phung po lnga pa* dang/ bdag gis bkod pa *rTog  
ge ’bar ba* la sogs par blta bar bya’o/ <sup>23)</sup>

となっている。しかるに、そこに記された「私が著わした *Madhyamakahrdayavṛttitarkajvālā* (*rTog ge ’bar ba*)」という、まさにそのことばが、*MRP* が Bhāvaviveka の著作といわれる根拠になったのである<sup>24)</sup>。ところが実際の内容からは、山口博士が論証されたように、*MRP* の作者は到底 *TJ* の作者と同一人物とは見做せないのである。そして、こうした混乱を招いた原因であるまさにそのことばの中に、「Candrakīrti 論師がお造りになった『中観五蘊論』(? *Madhyamakapañcaskandhaka*)」という語が現れるのである。それだからといって、Candrakīrti が *PSP*(1) を著わしたという記述を直ちに否定することなどできるはずはない。しかしながら、そのような疑惑に充ちた文章の中に、*PSP*(1) に関する記述が併記されている事実は、*PSP*(1) の記述にも不安定な要素が背後に存在しているのではないか、という印象を与えるに充分であろう。

また、先に述べた *PSP*(1) の名称の問題に関するが、ここに見られる、“*dBu ma*

(or *ma'i phung po lnga pa'*) という表現は、*PSP(1)* にもともと付されていたものではない。後に述べるように、*PSP(1)* が Vasubandhu の *PSP(2)* を念頭において作成された論書であることは明らかであるが、「中観 (の) 五蘊論」という言い方もその延長線の上に乗ったものとみてよい。

*PSP(1)* は、中観派の側から、唯識系の法相に対抗する必要上作成されたのであろうが、その点が更に強く意識され出した時期に、このような表現が意図的に用いられるようになったのである。したがって、「中観」ということを強調したこの表現は、*MRP* の中で初めて用いられたか、あるいは、それより幾分前の時代に使われるようになったのではないかと考えられる。*MRP* には Candrakīrti や Dharmakīrti の名が見られることから、この論書の成立年代は、ほぼ8世紀以降と見なしてよいのではないかと思われる。もしそうであるならば、「中観の」という限定を付して *PSP(1)* を捉えるようになったのは、最も早い時期でも8世紀初頭頃ではないかと推察される。

ちなみに、*MRP* のチベット語翻訳は、その colophon によれば、

/bla ma rJe btsun zangs gling pa dge bsnyen mgon pol/ pa ṅḍi ta  
chen po Dī paṃ ka ra śrī dznyā nas bka' drin zhus pa las/ phyis  
so ma pu ri'i gtsug lag khang du rgya brTson 'grus seng ge dang/  
Nag tsho tshul khriṃs rgyal ba gnyis kyis yang dang yang du zhus  
nas bsgyur cing gtan la phab pa'o/<sup>25)</sup>

とあり、Dīpaṃkaraśrīṅṅana (=Atīśa) が校閲したのち (zhus pa las), brTson 'grus seng ge と Tshul khriṃs rgyal ba の二人が、繰り返し校閲し (yang dang yang du zhus nas), 翻訳しつつ確定した、といわれている。

ここに見られるように、敢えて翻訳の様子を「繰り返し校閲した」というごとく記したことが示唆する意味については、十分注意を払う必要があるといえるであろう。なぜなら、繰り返し校閲されるうちに改竄がなされた場合もあったと思われるからである。しかし、この点について明確な答えを出すことが困難であることは言うまでもない。

(a-3) Atīśa の *Bodhimārgapradīpapañjikā* (『菩提道燈細疏』 = *BMPP*) に見られる Candrakīrti の著作リストとは、次のものである。

/slob dpon Zla grags kyis/ dBu ma la 'jug pa dang/ Rigs pa drug  
cu pa'i 'grel pa dang/ dBu ma'i (D.ed., ma) phung po lnga pa

dang/ *Tshig don gsal ba la sogs pa mdzad do*<sup>26)</sup>

ここには、Candrakīrti の主だった著作4篇が列挙されている。Atiśa の生存年代は982-1054年とされるから、彼の時代に *PSP*(1) が Candrakīrti の著作として既に十分定着していたのはむしろ当然のことである。

また、彼が、*PSP*(1) を「中観の五蘊論」と表現していることも、先にみた *MRP* の場合から推して自然のことといえるであろう。しかし、チベットに重大な影響を与えた彼が、“*dBu ma'i phung po lnga pa*” という表現を当たり前のこととして用いていたとすれば、それがチベットの仏教界に定着するために大きな力を与えたとみてもさしたる誤りにはならないであろう。

恐らく、先の *MRP* やこの *BMPP* など、“*dBu ma'i phung po lnga pa*” という言い方が見出せる文献は、Atiśa 及び Tshul khriṃs rgyal ba が著述・翻訳等に何等かの形で関係している文献か、あるいは、それ以後に成立した、*dKar chag* や目録に限定されるのではないかと想像されるのである<sup>27)</sup>。

(a-4) Lindtner 氏が指摘するように、Jayānanda (c.1100) の *Madhyamakāvataṛāṭīkā* に *PSP*(1) のものと見做しうる詩句が引用されている<sup>28)</sup>。彼は、チベットに Candrakīrti 系の中観思想が紹介される際に一翼を担った人物と言われるが<sup>29)</sup>、前項(a-3)の Atiśa の場合と同様、彼の活躍した年代<sup>30)</sup>から考えれば、*PSP*(1) を Candrakīrti の著作として疑わなかったとしても当然であろう。

(a-5) *PSP*(1) の末尾に見られる、著者が自分の名前を名乗っている箇所は、次のような韻文である。

/phung po lnga yi yang dag don/ /mdor bsdus rab bshad bstan bcos  
'di/ /'bad pa med pa'i 'jig rten 'di'i/ /don du Zla ba'i grags pas  
byas/ (305b3 ; p. 51, ll. 16-17)

五蘊の正しい意味を簡潔に纏めて説いたこの論を、

この努力無き世間のために、Candrakīrti が作成した。

ここでは *byas* という語が使われているので、翻訳者が、著者自身がこの *verse* を陳べていると理解したことが知られるのである。周知のごとく、原文になかったものを、翻訳に携わった者など、他の人が付加して書いた場合は、一般に敬語である *mdzad* の語が用いられる。実際、この *verse* の直後に、先に引いた、

*/Phung po lnga pa zhes bya ba'i rab tu byed pa slob dpon Zla ba*

grags pas mdzad pa rdzogs so/ (305b3-4 ; p. 51, ll. 18-19)

という、締め括りの文が付されている。

しかし、何れにしても、これは少々奇妙ではないか。著者である Candrakīrti 自身が、自分の名前を記して、自作であることを強調しているのである。例えば、*Prasannapadā* の各章の末尾には、「以上は、ācārya Candrakīrti の造った『浄明句論、中論釈』のうち、「縁の観察」という第一章である」などというように<sup>31)</sup>、その著者の名を記している例もあるが、これは ācārya という語が付せられていることから判るように、後から他の人の手が加わったものである<sup>32)</sup>。したがって、いま問題にしている場合とは明らかに異なるといえる。

当面のこの verse が、本当に Candrakīrti によって書かれたものであるのか、あるいは、*PSP(1)* は彼の作ではなく、他の者によって著わされ、その人物が Candrakīrti の著作に帰するために意図的に書き加えたものなのか、あるいはまた、後世の者、例えばチベット語への翻訳者が、Candrakīrti の著作であることを強調するために、敢えて付加したものなのか、そうしたことについては知るすべがない。しかし、とにかく、この詩句の存在がかえって *PSP(1)* を Candrakīrti の作であると見做すことに対して、ある種の抵抗を感じさせることだけは確かである。

Lindtner 氏は、以上のような客観的な基準 (a-1~5) の外に、主観的基準 (b) として、

- (1) *Prasannapadā Madhyamakavṛtti*, *Śūnyatāsaptatīvṛtti*, *Yuktiṣaṣṭhikavṛtti*, *Catuḥśatakavṛtti*, *Madhyamakāvatārabhāṣya* と *PSP(1)* の引用文献の共通性。
- (2) *PSP(1)* の明快で力強い文体が Candrakīrti の他の著作の文体と通ずること。
- (3) 「慧 (prajñā)」に関するパラグラフに示される教理的見地と、Candrakīrti の他の著作に見られる教理的見地との一致。

という 3 点を示して、先の客観的基準との両方から *PSP(1)* を Candrakīrti の著作と結論づけている。

このうち (b-1) の引用の点については、Lindtner 氏が予告している *PSP(1)* の註釈的研究を、筆者はまだ見ていないので、どのような内容を氏が指摘してい



るのか判然としない。恐らくは「慧」の解説の箇所で行かれているいくつかの引用のことを指しているのであろうが<sup>33)</sup>、それらにはたしかに共通する内容のものが認められるようである。

(b-2) については、主観的な要素があまりに強くて判断は下しにくい。

(b-3) については、山口博士は、「慧の心所に関する月称の言葉の中には、月称によって展開せられる中観説の形態がよくあらわれていると思われるものがあるので、…」と述べておられる<sup>34)</sup>。一方、Lindtner氏は、そこに見られる教理的見地が Candrakīrti の他の著作のものと “exactly the same” であると言う。しかし、そこまで決定的な表現を採ってよいものかどうかは疑問である。

以上の「主観的基準」のうち、(b-2) 以外は Candrakīrti の著者性を幾分裏付けるとは思われる。しかしながら、筆者は、(b-1) (b-3) のいずれもが、「慧の心所」の箇所に限られていることに注意すべきであると考え。この点については、後でまた触れるであろう。

#### 4 構造について

*PSP*(1) は *PSP*(2) 及び *PAA* の両者に関連が強いのであるが、以下に三者の梗概を比較した表を掲げ、検討することにしたい<sup>35)</sup>。

<i>PSP</i> (1)					<i>PSP</i> (2)		<i>PAA</i>	
		P. ed. (Ya)	D. ed. (Ya)	Lindtner (p. l.)				
0	序	273 b 6	239 b 1	1. 2	0	序	0	序
I	五蘊	274 a 5	239 b 6	1. 4	I	五蘊	I	総説
I.1	色蘊	274 a 5	239 b 6	1. 26	I.1	色蘊	II	色句義
I.2	受蘊	278 b 5	243 b 3	8. 18	I.2	受蘊	III	受句義
I.3	想蘊	279 b 8	244 b 3	10. 11	I.3	想蘊	IV	想句義
I.4	行蘊	280 b 2	245 a 3	11. 10	I.4	行蘊	V	行句義
							V.1	総括
I.4 a	心相應行	281 a 6	245 a 6	12. 10	I.4 a	心所法	V.2	相應
I.4 b	心不相应行	303 b 8	265 a 5	48. 4	I.4 b	心不相应行	V.3	不相应
I.5	識蘊	304 b 4	265 b 7	49. 25	I.5	識蘊	VI	識句義
II	十二処	305 a 4	266 a 7	50. 24	II	十二処	VII	因・果・縁
II.1	意処・法処	305 a 5	266 b 1	50. 26	II.1	十二処		

## (32) Candrakīrti『五蘊論』における諸問題 (池田)

Ⅱ.2	三無為	305 a 7	266 b 3	51. 3	Ⅱ.2	(四)無為	
Ⅱ.2 a	虚空	305 a 8	266 b 3	51. 3	Ⅱ.2 a	虚空	VIII 虚空句義
Ⅱ.2 b	非択滅	305 a 8	266 b 3	51. 5	Ⅱ.2 b	非択滅	IX 択滅句義
Ⅱ.2 c	択滅	305 a 8	266 b 4	51. 6	Ⅱ.2 c	択滅	X 非択滅句義
					Ⅱ.2 d	真如	
Ⅲ	十八界	305 b 1	266 b 4	51. 9	Ⅲ	十八界	
Ⅳ	結語	305 b 2	266 b 5	51.14			XI 結語

この表によって明らかなように、*PSP*(1) の骨格は *PSP*(2) の骨格と極似している。両論の違いは、大きな点では、*PSP*(1) が虚空・非択滅・択滅の三無為を構造の骨格に採り入れているのに対して、*PSP*(2) は、三無為に真如無為を加えた四無為説を論構造の骨格に採用している点のみである。

先に *PSP*(1) の題名についてみた際にも触れたように、この二つの論書における共通性は歴然としており、成立年代等を含めて両者の関係を考えれば、この場合、やはり *PSP*(1) は *PSP*(2) の影響を強く受けて著わされたと見做すのが妥当である。

*PSP*(1) と *PAA* の構造も、細かい点を意識せずに全体的に捉えた場合には、かなりの相似性を認めることができる。しかし、その相似性は、*PSP*(1) と *PS* *P*(2) に認めうる近似性と比較した場合、むしろ全く *PAA* に依っていないとみてよい程度のものである。

*PAA* 及び *PSP*(2) はいずれも *PSP*(1) に先行する論書である<sup>36)</sup>。もし、*PSP*(1) の著者が、どちらの論書をも参照することが可能であったと仮定するならば、あるいは、どちらの論書をも参照していると仮定するならば、*PSP*(1) は、構造上は、やはり *PSP*(2) にのみ基づいていると判定しても大過ないであろう。なぜなら、*PSP*(1)、*PSP*(2) はいずれも五蘊・十二処・十八界の、いわゆる三科を基本的な骨格に据えているが、それに対して *PAA* は色・受・想・行・識・虚空・択滅・非択滅の八種の句義 (*padārtha*) を基本的な骨格としているからである<sup>37)</sup>。

もっとも、*PSP*(1) 及び *PSP*(2) は、上記のごとく三科を基本構造としてはいるが、両者の題名が示すように、実際の論述は五蘊の枠組みの中で説かれており、十二処及び十八界の部分は古来の「蘊 (*skandha*)・処 (*āyatana*)・界 (*dhātu*)」という形式を壊さぬために取り入れられていると見做すことができる。しかし、

一方 *PAA* は、前記の二論書が曲がりなりにも十二処・十八界による構造上の部分を持つ対して、この両方について構造的にはおろか、触れることもないのである。

以上のことからみて、論書の構造の点で *PAA* が *PSP(1)* に及ぼした影響は、ほとんどなかったか、あるいは、あったとしても第二次的なものであったと言えることができる。これに対して、*PSP(1)* と *PSP(2)* は構造的にあまりにも似ており、両者の一致を単なる偶然と見做すことは到底できない。したがって、*PSP(1)* の作者は、論書を著わすに際して *PSP(2)* の存在を強く意識し、十分参照していたと推察できるのである。

## 5 本文における諸問題

I. ところで、構造の上ではあまり近い関係を指摘することはできないが、内容的には、*PSP(1)* と *PAA* には無視できないほどの類似性が認められる。それは殊に心相應行法の解説の箇所にも顕著に現れている。そこで説かれる諸の心所法や、その配列、解説は、*PSP(2)* よりもむしろ *PAA* に非常に近いものである<sup>38)</sup>。

以下に、*PSP(1)・PAA・PSP(2)* の心相應行 *cittasamprayukti-samskāra* (心所法 *caitasika*) の解説の箇所において取り上げられる諸法を整理して比較した表を掲げることとする<sup>39)</sup>。

### *PSP(1)* における心相應行法

<i>PSP(1)</i> 漢訳 Skt.			<i>PAA</i>	<i>PSP(2)</i>
	P. ed.	Lind. ed.		
1. 思 <i>cetanā</i>	281 a 6	12. 11	1. 思	[1] 遍行
2. 触 <i>sparsā</i>	281 b 1	12. 21	2. 触	1. 触
3. 作意 <i>manaskāra</i>	281 b 6	13. 5	3. 作意	2. 作意
4. 欲 <i>chanda</i>	282 b 1	14. 1	4. 欲	3. 受
5. 勝解 <i>adhimukti</i>	283 a 7	15. 10	5. 勝解	4. 想
6. 信 <i>śraddhā</i>	283 b 1	15. 18	6. 信	5. 思
7. 精進 <i>virya</i>	283 b 8	16. 5	7. 精進	[2] 別境
8. 念 <i>smṛti</i>	284 a 1	16. 9	8. 念	6. 欲
9. 定 <i>samādhi</i>	284 a 1	16. 11	9. 定	7. 勝解
10. 慧 <i>prajñā</i>	284 a 2	16. 15	10. 慧	8. 念

11. 尋 vitarka	291 b 4	27. 11	11. 尋	9. 定
12. 伺 vicāra	292 a 5	28. 8	12. 伺	10. 慧
13. 放逸 pramāda	292 b 1	28. 21	13. 放逸	[3] 善
14. 不放逸 apramāda	292 b 1	28. 24	14. 不放逸	11. 信
15. 厭 nirvid	293 a 2	29. 21	15. 厭	12. 慚
16. 欣 prahaṛṣa	293 a 3	29. 25	16. 欣	13. 愧
17. 輕安 prasrabdhi	293 a 4	29. 27	17. 輕安	14. 無貪
18. 害 vihiṃsā	293 a 6	30. 1		15. 無瞋
19. 不害 avihiṃsā	293 a 7	30. 4	18. 不害	16. 無癡
20. 慚 hri	293 a 7	30. 6	19. 慚	17. 精進
21. 愧 apatrāpya	293 b 1	30. 13	20. 愧	18. 輕安
22. 捨 upekṣā	293 b 2	30. 16	21. 捨	19. 不放逸
23. 解脫 vimukti	293 b 5	30. 24		20. 捨
24. 善根 kuśalamūla	293 b 6	30. 28	22. 善根	21. 不害
(1) 無貪			(1) 無貪	
(2) 無瞋			(2) 無瞋	
(3) 無癡			(3) 無癡	
25. 不善根 akuśalamūla	294 a 2	30. 10	23. 不善根	
(1) 貪			(1) 貪	
(2) 瞋			(2) 瞋	
(3) 癡			(3) 癡	
26. 無記根 avyākṛtamūla	294 a 4	30. 18	24. 無記根	
(1) 愛 tṛṣṇā			(1) 愛	
(2) 無明 avidyā			(2) 見	
(3) 慧 mati			(3) 慢	
27. 結 saṃyojana			(4) 無明	
(1) 愛結 anunaya-s.			25. 結	
(2) 恚結 pratigha-s.			(1) 愛結	
(3) 慢結 māna-s.			(2) 恚結	
(4) 無明結 avidyā-s.			(3) 慢結	
(5) 見結 drṣṭi-s.			(4) 無明結	
(6) 取結 parāmarśa-s.			(5) 見結	
(7) 疑結 vicikitsā-s.			(6) 取結	
(8) 嫉結 irṣyā-			(7) 疑結	
(9) 憍結 mātsarya-s.			(8) 嫉結	
28. 縛 bandhana	297 a 5	36. 16	(9) 憍結	
(1) 貪縛			26. 縛	
			(1) 貪縛	

(2) 瞋縛				(2) 瞋縛	
(3) 癡縛				(3) 癡縛	
29. 随眠 <i>anuśaya</i>	297 a 6	36. 19		27. 随眠	[4] 煩惱
(1) 貪随眠 <i>rāga-a.</i>				(1) 欲貪随眠	22. 貪
(2) 瞋随眠 <i>pratigha-a.</i>				(2) 瞋随眠	23. 瞋
(3) 慢随眠 <i>māna-a.</i>				(3) 有貪随眠	24. 慢
(4) 無明随眠 <i>avidyā-a.</i>				(4) 慢随眠	25. 無明
(5) 見随眠 <i>dr̥ṣṭi-a.</i>				(5) 無明随眠	26. 見
(6) 疑随眠 <i>vicikitsā-a.</i>				(6) 見随眠	27. 疑
				(7) 疑随眠	
30. 随煩惱 <i>upakleśa</i>	300 a 3	41. 7		28. 随煩惱	[5] 随煩惱
(1) 誑 <i>māyā</i>				(1) 誑	28. 忿
(2) 僞 <i>mada</i>				(2) 僞	29. 恨
(3) 害 <i>vihimsā</i>				(3) 害	30. 覆
(4) 惱 <i>pradāsa</i>				(4) 惱	31. 惱
(5) 恨 <i>upanāha</i>				(5) 恨	32. 嫉
(6) 諂 <i>śāṭhya</i>				(6) 諂	33. 慳
31. 纏 <i>pariyavasthāna</i>	300 b 5	42. 11		29. 纏	34. 誑
(1) 昏沈 <i>sthyāna</i>				(1) 昏沈	35. 諂
(2) 睡眠 <i>middha</i>				(2) 睡眠	36. 僞
(3) 掉拳 <i>auddhatya</i>				(3) 掉拳	37. 害
(4) 惡作 <i>kaukr̥tya</i>				(4) 惡作	38. 無慚
(5) 慳 <i>mātsarya</i>				(5) 嫉	39. 無愧
(6) 嫉 <i>ir̥ṣyā</i>				(6) 慳	40. 昏沈
(7) 無慚 <i>āhrikya</i>				(7) 無慚	41. 掉拳
(8) 無愧 <i>anapatrāpya</i>				(8) 無愧	42. 不信
(9) 忿 <i>krodha</i>				(9) 忿	43. 懈怠
(10) 覆 <i>mrakṣa</i>				(10) 覆	44. 放逸
32. 漏 <i>āsrava</i>	301 a 8	43. 27		30. 漏	45. 忘念
(1) 欲漏				(1) 欲漏	46. 散乱
(2) 有漏				(2) 有漏	47. 不正知
(3) 無明漏				(3) 無明漏	[6] 不定
33. 暴流 <i>ogha</i>	301 b 5	44. 9		31. 暴流	48. 惡作
(1) 欲暴流				(1) 欲暴流	49. 睡眠
(2) 有暴流				(2) 有暴流	50. 尋
(3) 見暴流				(3) 見暴流	51. 伺
(4) 無明暴流				(4) 無明暴流	
34. 轉 <i>yoga</i>	301 b 7	44. 17		32. 轉	

(36)

Candrakīrti 『五蘊論』における諸問題 (池田)

((1)~(4)暴流と同じ)

35. 取 upādāna 301 b 7 44. 18

- (1) 欲取
- (2) 見取
- (3) 戒禁取
- (4) 我語取

36. 身繫 (kāya-)grantha 302 a 8 45. 16

- (1) 貪身繫
- (2) 瞋身繫
- (3) 戒禁取身繫
- (4) 見取身繫

37. 蓋 nivarāṇa 302 b 3 45. 27

- (1) 欲貪蓋
- (2) 瞋恚蓋
- (3) 惛眠蓋
- (4) 掉悔蓋
- (5) 疑蓋

38. 智 jñāna 302 b 5 45. 32

- (1) 法智 dharmā-j.
- (2) 類智 anvaya-j.
- (3) 他心智 paracitta-j.
- (4) 世俗智 saṃvṛti-j.
- (5) 苦智 duḥkha-j.
- (6) 集智 samudaya-j.
- (7) 滅智 nirodha-j.
- (8) 道智 mārga-j.
- (9) 尽智 kṣaya-j.
- (10) 無生智 anutpāda-j.

39. 忍 kṣānti 303 b 6 47. 26

- (1) 苦法智忍
- (2) 苦類智忍
- (3) 集法智忍
- (4) 集類智忍
- (5) 滅法智忍
- (6) 滅類智忍
- (7) 道法智忍
- (8) 道類智忍

((1)~(4)暴流と同じ)

33. 取

- (1) 欲取
- (2) 見取
- (3) 戒禁取
- (4) 我語取

34. 身繫

- (1) 貪身繫
- (2) 瞋身繫
- (3) 戒禁取身繫
- (4) 見取身繫

35. 蓋

- (1) 欲貪蓋
- (2) 瞋恚蓋
- (3) 惛眠蓋
- (4) 掉悔蓋
- (5) 疑蓋

このようにして比較すると、*PSP*(1) において心相応行法として解説される心所法の内容や、配列順は *PAA* における場合とあまりにも相似していることが判る。いくらかの出入りを除けば、両者の法相は、ほとんど正確に一致している。このことから、*PSP*(1) の著者は、その論を作成するに際して *PAA* を参考にしたか、あるいはもともと *PAA* の系統のアビダルマの教養を十分に身に付けた人物であることになる。これは、*PSP*(1) の著者の出家受戒した部派、すなわち所属部派及び系統を考えるうえで大きな手掛かりになるはずである。

もっとも、それぞれの法の解説は必ずしも全てにわたって一致するわけではない。瓜生津博士が指摘されているように、*PSP*(1) は *AKBh* からも法相上の解釈をかなりの程度に借りているようである<sup>40)</sup>。

したがって、*PSP*(1) は、構造的な骨組みは *PSP*(2) のものを借用し、内容的には、自らが本来持っていたアビダルマ的教養、あるいは *PAA* の法体系に基づき、更に、*AKBh* などに見られる法相の解釈を適宜採用して著わされた論書であるということになる。

Ⅱ. 以上のように *PSP*(1) は、*PSP*(2) と *PAA* の両論と、それぞれ構造と内容の点で類似しているが、しかし、こうして比較してきた二論書との類似の中で、*PSP*(1) にのみ際立って異なる特徴は、「慧 (*prajñā*)」についての解説の特異性にあるであろう。そこで *PSP*(1) は、全体のバランスを無視して、単なる「慧」の解説に止まらずに、実に広範にわたって自説を展開しているのである。このことは、仏教術語について簡潔な解説を行なっている他の部分と著しく異なり、また自ら「簡潔に纏めて説いたこの論 (*mdor bsdus rab bshad bstan bcos 'di*)」(305b3 ; p. 51, l. 16) と述べていることとも矛盾している。この「慧」の箇所は *PSP*(1) 全体の約4分の1にも及んでいるが、いずれにせよ、これはこの論書の全体的な性格からみた場合には、いかにも不自然な印象を与えるのである。

しかしながら、そこで展開される所説が、中観的な色彩を濃厚に有しており、後世この論書が「中観の五蘊論」と称せられるようになる大きな要因になっていることは山口博士の指摘されるとおりである<sup>41)</sup>。

Ⅲ. *PSP*(1) 本文に見られる問題点を考える上で、見過ごせないのは「無為 (*asaṃskṛta*)」に関する記述の矛盾である。すなわち、*PSP*(1) は、構造上「十二処」に相当する箇所が無為を説き (表1参照)、そこでは、虚空・非択滅・択滅の三無為説を示している<sup>42)</sup>。それにもかかわらず、「慧」の心所の解説の箇所で法の

分類を説くときには、択滅・非択滅・虚空・諸法の真如の四無為説を示している<sup>43)</sup>。

言うまでもなく、無為説はアビダルマの諸説の中でも無視できないものであり、それによっていずれの立場に立つ人物かを推測することのできる、基準の一つともなるものである。そのような無為説について、簡潔に法相を解説することを目指し、また実際それほど大部でない *PSP(1)* に矛盾が見られるのは、やはり奇異な感をまぬがれない。瓜生津博士はこの点について、「無為説について不統一のままに残していることは不用意であったといわざるをえない」と言われる。

たしかに、Candrakīrti が無為説に二種あることを知っていたのは事実である<sup>44)</sup>。が、しかし、このことは「不用意」などというような問題ではありえない。もし *PSP(1)* が、一人の著者によって著わされた論書であるならば、その人の不定見を問われても致し方ないような問題なのである。

したがって、このことは同一人物による単なる錯誤によって起ったと考えるよりは、むしろ、「慧」の心所の解説と無為の箇所とが別々に著わされ、両者が、それこそ「不用意」に合せられたか、あるいは、もともと三無為か四無為のいずれかに統一されていたものに、後世の人の手が加わったか、どちらかに考える方が穏当ではないか。とにかく、同じ人物が何のコメントも付さずに、この二つの説を提示することは、不自然なことと言わなければならない。

Ⅳ. 以上述べた点とは幾分異なる視点からであるが、いま一つ注意を喚起しておきたいのは、有為 (saṃskṛta) の三相 (tri-lakṣaṇi) と四相 (catur-lakṣaṇi) との問題である。*PSP(1)* は、心不相応行法を列挙する際に、

生 (skye ba, jāti) とは何であるかということ、〔五〕蘊が生ずること (mngon par 'grub pa, abhinirvṛtti) である。

老 (rga ba, jarā) とは何であるかということ、成熟すること (yongs su smin pa, paripāka) である。

住 (gnas pa, sthiti) とは何であるかということ、生じた諸法が棄捨されないこと (rnam par mi nyans pa, avihina) である。

無常 (mi rtag pa, anityatā) とは何であるかということ、生じた諸の有為〔法〕が破滅すること (rnam par 'jig pa, vināśa) である。

という、四種の法を挙げて<sup>45)</sup>。言うまでもなく、これらはいわゆる有為の四相と言われるものである。



しかし、有為の相 (lakṣaṇa) には、この他に、三相という纏め方もある。それについては *PSP*(1) が参照していた可能性のある *PAA* 及び *AKBh* にも論述されており<sup>46)</sup>、そうした議論を経て、両論とも四相説に落ち着いているのである。

ところで、*Prasannapadā* の第7章は有為について論ずる章であるが、Candrakīrti はそこで、Nāgārjuna (竜樹, c. -150-) の Kārikā に基づいて、有為を三相 (tri-lakṣaṇī) によって論じている。その際には、四相の説については触れられることがない。すなわち、Candrakīrti は、四相説に関してコメントする必要を感じていないのである。これは、彼にとっても Nāgārjuna と同様に三相説が自明のことであったからではないか。

しかるに、その同じ人物が *PSP*(1) を著わすに当っては、何等の躊躇も示さずに四相説をもって説いているのである。簡潔に法相を纏めることを目的としているとはいっても、一方では「慧」の心所の箇所、全体のバランスを乱してまで極めて長い論述を展開しているのである。それ故、三相についての短い註釈を付すことが、それほど抵抗のあることであったとは思われない。

また、*PSP*(1) と *Prasannapadā* のどちらが先に著わされたにしても、*PSP*(1) に中観的な特徴が存在するのであるから、その時点で *PSP*(1) の著者は、当然 *Mūlamadhyamakakārikā* の存在を知っていたはずである。したがって、Nāgārjuna の採用している三相説と異なる場合には、その人物が「中観派」ということを意識していればいるほど、四相について述べる際に、註釈をつける必要性を感じるのではないかと思われるのである。

## 6 まとめ

以上のようなことからみて、*PSP*(1) には、種々の問題が存在することが知られるのである。まずアビダルマとしての特徴についてまとめてみよう。

この論は、構造的な骨格を Vasubandhu の *PSP*(2) から借用していると見做すことができる。このことは、*PSP*(1) の著者が中観派としての立場から、唯識、あるいは経量部系の法相を纏めた論書として *PSP*(2) の存在を強く意識し、それに対抗して、自らの立場から法体系を纏めた論書を著わそうとしたことを想像させる。その際、フレームとしては *PSP*(2) が用いられたが、中身としては *PAA* の系統のアビダルマが用いられた。すなわち、*PSP*(1) の著者の仏教術語に關す

る基礎的な教養は、*PAA* 系統の部派のものに基づく可能性が強い。

ところで、*PAA* は、すでに明らかにされているように、極めて特異な論書である。構造は「八句義」という、ほかに例をみないような組織からなり、法相は有部の古層のものに類似している<sup>47)</sup>。しかし、その成立の時期（4, 5世紀頃?）には、有部においては、法相的な学説はかなり進んでおり、*PAA* のような説を主張することは、時代錯誤であるといっても過言でない状況であった。けれども *PAA* には註釈書も存在するので、この系統のアビダルマが伝承されていたことは確かであろう。そして、*PSP*(1) はそのような独特のアビダルマに基づいているのである<sup>48)</sup>。

次に、*PSP*(1) の著者については、従来 Candrakīrti とされており、また実際、それを覆すような決定的な資料は存在しない。しかし、先に見てきたように、直ちに Candrakīrti の作と決めてかかることを躊躇させるような、いくつかの要因が存在することも事実である。

更に、無謀とも思えるほど大胆な仮説を敢えて立てるならば、「慧」の心所の解説の箇所のみを Candrakīrti が著わしたというようにも想像されるのである。というのは、*PSP*(1) の中で中観的な色彩が最も顕著に認められるのはこの箇所だけであり、かつ、この部分は論書全体の中で異常に突出した部分だからである。また、前述のごとく、*PSP*(1) には二つの無為説の混在というように同一の著者が著わしたと見做し難いような要素も存在するからである。

因に、Tsong kha pa (1357-1419) も、*PSP*(1) を直ちに Candrakīrti の著作であると認めるのを躊躇しており、彼は、修道論に見られる矛盾点を指摘して論述している<sup>49)</sup>。また、Tsong kha pa は、*PSP*(1) について「具徳 Candrakīrti がお造りになったと伝えられる *Pañcaskandhaprakaraṇa* (dpal ldan Zla grags kyis mdzad zer ba'i Phung po lnga'i rad byed)」というように表現している。これは、もし彼が Candrakīrti の著作であることを疑っていなかったら、“... kyis mdzad zer ba'i ...” などという言いかたをせずに、ただ“... kyis mdzad pa'i ...” というように表現したと考えられる。その意味で、彼のことばには十分耳を傾けなければならないと思われるのである。

#### 註

- 1) 説一切有部の論書のうち、例えば『阿毘曇心論』（大正蔵 No.1550）、『阿毘曇心論

経』(大正蔵 No.1551)などがそれに当るであろう。簡潔とはいえないが、*Abhidharmakośabhāṣya* (『阿毘達磨俱舍論』大正蔵 No.1558,1559)も法相を体系的に整理しているという意味では数えてもよいであろう。

- 2) 唯識系の論書のうち、典型的なのは『大乘百法明門論』(大正蔵 No.1614)である。また、*Abhidharmasamuccaya* (『阿毘達磨集論』大正蔵 No.1605)や *Triṃśikāvijñaptimātratāsiddhi* (『唯識三十頌』大正蔵 No.1586,1587)などが挙げられよう。
- 3) サンスクリット原典なし。チベット語訳, Peking edition No.5267, (vol.99), Ya 273b6-305b5; sDe dge ed. No.3866, Ya 239b1-266b7. Chr. Lindtner 氏に校訂 text がある。(Candrakīrti's *Pañcaskandhaprakaraṇa*, I. Tibetan Text, *Acta Orientalia*, vol.40, pp.95-145 (pp.1-51).
- 4) Candrakīrti の著作としては、(1) *Madhyamakāvatāra* (『入中論・註』), (2) *Pañcaskandhaprakaraṇa* (『五蘊論』), (3) *Prasannapadā* (『中論註・明句論』), (4) *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* (『六十頌如理論註』), (5) *Śūnyatāsaptatīvṛtti* (『空七十論註』), (6) *Catuḥśataka* (『四百論註』), (7) *Trisaranasaptati* (『三帰依七十論』)がある。瓜生津隆真博士(「中観仏教におけるボサツ道の展開 —チャンドラキールティの中観学説への一視点—」(『鈴木学術財団研究年報』1, pp.63)=瓜生津(1)), Chr. Lindtner 氏 op. cit., pp.88-89.)は、Candrakīrti の著作として *Madhyamakaprajñāvatāra* (『入中観智慧』)を数えているが、この書は、上記7論書の著者の Candrakīrti とは別の人物の作である。cf.『デルゲ版チベット大蔵経論書部』中観部7, p.7の江島恵教博士の記述(東京大学文学部印度哲学印度文学研究室,世界聖典刊行協会,1878年,東京)。同,「中観派」pp.103-104,注10(平川彰編『仏教研究入門』,1984年,大蔵出版)参照。なお,Lindtner 氏の論文の存在は松本史朗氏より御教示いただいた。氏からはこの他にもいくつもの有益な御教示を受けた。
- 5) 瓜生津前掲論文, p.63.
- 6) 瓜生津博士,前掲「中観仏教におけるボサツ道の展開(瓜生津(1)と略す)」esp. pp.63-64, p.76, n.65 etc. 同,「中観学派におけるアビダルマー月称造『五蘊論』管見一(瓜生津(2)と略す)」『三蔵』116(『国訳一切経印度撰述部月報・三蔵集』第三輯, pp.185-192, 1978年,大東出版社,本稿ではこちらを用いた。)
- 7) 山口益博士「月称造五蘊論における慧の心所の解釈(山口(1)と略す)」『金倉圓照博士古稀記念 印度学仏教学論集』pp.293-321, 1966年10月,平楽寺書店。また,後に『山口益仏教学文集』下, pp.437-464(1973年5月,春秋社)に収録された。本稿では後者を用いた。
- 8) Chr. Lindtner 前註(3)で示した論文(pp.87-145)。
- 9) 瓜生津(1) pp.63-64, 瓜生津(2) pp.185-192. 山口前掲論文(1) pp.439-443.
- 10) Tib. 訳, Peking ed. No.5560; sDe dge ed. No.4059. 漢訳(玄奘訳)大正蔵

No. 1612.

- 11) Tib. 訳, P. ed., No. 5599. 漢訳 (玄奘訳) 大正蔵 No.1554. *PAA* の著者については, 中国における伝承では, 音写で「塞建陀 (or 地) 羅」(これを *Skandhila* と還元する説等がある), また漢訳して「悟入」とするが, 疑問な点が多く, はっきりしない。桜部建「入阿毘達磨論の研究」『大谷大学研究年報』No. 18, pp.165-168. 参照。(この論文は『仏教語の研究』(1975年7月, 文栄堂書店)に再収録 (pp.121-177)されたが, 本稿では前者のものをを用いる。) cf. 拙論『『入阿毘達磨論』の煩惱論』『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第14号 pp.253-250 参照。
- 12) Skt. text, P. Pradhan ed., *Abhidharma Kośabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series, vol. 3, Patna 1967. Tib. 訳, P. ed., No.5591. 漢訳, (玄奘訳) 大正蔵 No.1558, (真谛訳) 大正蔵 No.1559.
- 13) 瓜生津 (2) p.186ff.
- 14) 前掲の Lindtner 氏の論文には, *PSP*(1) に対する訳註と, サンスクリットの fragments など載せた論文を *Acta Orientalia* 誌上に掲載すると予告されている (pp. 87, 92)。しかし筆者は, 1982年の vol. 43 までの同誌しか見ることができなかったので, 現在の段階でその論文が刊行されているか否か確認しえなかった。
- 15) D. ed., 239b1. ただし *PSP*(1) の末尾には後で触れるように, “*Phung po lnga pa zhes bya ba'i rab tu byed pa*” という題名が記されている (後註(19))。
- 16) *MRP*, P. ed., No.5254, Tsha 335b3; D. ed., No.3854, Tsha 266b3-4.
- 17) P. ed., *dKar chag*, Tsho 112a5.
- 18) Lindtner, *op. cit.*, pp.91-92.
- 19) D. ed., 266b6.
- 20) 前註 (17) 参照。cf. 後註 (27)。
- 21) P. ed., No. 5254, Tsha 351b7-352a2. 「教師 Candrakīrti のおことばによると, [法] の本性 (*bhāva*) は2種であって, [すなわち] 有色 (*rūpin*) と無色 (*arūpin*) である。有色は2種であって, 大種 (*bhūta*) と大種所造 (*bhautika*) である。無色の法は2種であって, 有為 (*saṃskṛta*) と無為 (*asaṃskṛta*) である。有為法は3種であって, 心 (*citta*) と心所 (*caitasika*) と不相応 (*viprayukta*) である。無為法は4種であって, 択滅 (*pratisaṃkhyānirodha*) と非択滅 (*a-pratisaṃkhyānirodha*) と虚空 (*ākāśa*) と諸法の真如 (*tathatā*) であると言われるのであるが, ……」  
cf. 山口益「中観派に於ける中観説の綱要書—中観宝燈論について— (=山口(2))」『大谷大学研究年報』2, p.84. (この論文は, 『山口益仏教学文集』上 (昭和47年2月, 春秋社) に再録)。なおこの箇所該当する Lindtner 氏の引用文には脱落がある。
- 22) 山口 (2), pp.85-91.
- 23) 前註 (16) 参照。cf. 山口 (2), pp.83, 90, 113.

- 24) 山口 (2), p. 90.
- 25) *MRP*, P. ed., 365a7-8; D. ed., 289a6-7.
- 26) ① *Madhyamakāvātāra* (*dBu ma la 'jug pa*), ② *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* (*Rigs pa drug cu pa'i 'grel pa*, ③ ? *Madhyamakapañcaskandhaka* (*dBu ma'i* (D. ed., *ma*) *phung po lnga pa*, ④ *Prasannapadā* (*Tshig don gsal ba*).
- 27) チベットの最古の仏教文献目録である *lDan dkar ma* 目録 (824年成立, cf. 山口瑞鳳「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』第3号, pp. 18-20) には, *PSP* (1) についての記述は見られない。因に, *PSP* (2) 及びその関係書の記載は現在の大蔵経所収のものとはほぼ同様の形で見られる。cf. M. Lalou: *Les Textes Buddhiques au Temps du Roi Khri-sroñ-lde-bcan*, *JA* 241, Transcription 638, (639), 640-642. しかし, 1322年成立の *bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyī 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod ces bya ba* (『プトゥン仏教史』の第4章「目録部」には, *PSP* (1) が, “slob dpon Zla ba grags pas mdzad pa'i *dBu ma phung po lnga'i rab tu byed pa Nag tsho'i 'gyur*” というように記されている。cf. 西岡祖秀「『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅱ」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第5号, p. 52, No. 577. *lDan dkar ma* 目録と *Bu ston* (1290-1364) の目録は, 約500年も隔っているため, この間のチベットにおける仏教文献の流布・伝播・翻訳等の状況が明らかでないのは残念であるが, 少なくとも, *Bu ston* の頃のチベットの仏教界では, *PSP* (1) は, “*dBu ma phung po lnga'i rab tu byed pa*” が論書の名称として扱われるほど定着していたことが分かる。
- 28) *Madhyamakāvātāṭikā*, P. ed., No. 5271, Ra 49a2-3; D. ed., No. 3870, Ra 40b 6-41a1:  
 /'dod pa'i rnam pa drug pa dang // dgu pa'i yang dag zad pa yis /  
 /lan cig phyir ni 'ong ba dang // phyir mi 'ong ba'i gang zag 'gyur /  
 /srid rtse'i tha mar zad pa yis // dgra bcom de rnams lam la gnas /  
 /de yi sbyor ba la gnas bzhi // de la zhugs pa zhes ni brjod /  
 /dgra bcom mi slob gzhan bdun slob // zad po (D. ed., pa) slob pa yin pas so/  
*PSP* (1), P. ed., 299a8-299b2; p. 40, ll. 3-8;  
 /'dod pa'i rnam pa drug pa dang // dgu pa dag ni zad pa las /  
 /lan cig phyir ni 'ong ba dang // phyir mi 'ong ba'i gang zag 'gyur /  
 /dgra bcom srid rtse'i mtha' zad pas // lam la gnas pa bzhi po dag //  
 /de la sbyor bar zhugs pa'i phyir // de dag zhugs pa zhes brjod do /  
 /dgra bcom mi slob slob pa ni // zad phyir slob pas gzhan bdun no /
- 29) 江島恵教『中観思想の展開』(1980年2月, 春秋社) p. 248 参照。
- 30) 江島前掲書, p. 258 参照。

(44) Candrakīrti『五蘊論』における諸問題 (池田)

- 31) “īty ācārya Candrakīrti pādoparacitāyāṃ *Prasannapādāyāṃ Madhyamakavṛttau* Pratyayaparikṣā māma prathamam prakaraṇam” *Prasannapādā*, Poussin ed., p.91, II.9-10, etc.
- 32) Tib. 訳でも “zhal snga nas sbyar ba’i...” (P. ed., No.5260, ’a 35a2) というように敬語を用いて訳しており、他人のことばとして理解している。
- 33) 例えば, *PSP*(1), 288b7-289a1 (p.22, l.30-p.23, l.2) に見られる経文の引用が、同じく Candrakīrti 造の *Bodhisattvayogacaryācatuḥśatakaṭikā* (P. ed., No. 5266) にもみられる (174b8) ことなどをいうのであろう。しかし、引用文献に共通のものがみられることが、同一人物の作であることをどれほど裏付けるかについては、かなり慎重に考える必要があろう。
- 34) 山口前掲論文 (2), p.445.
- 35) 以下の対照表は、筆者が先に「『入阿毘達磨論』の煩惱論」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第14号)の中で示したもの (pp.248-246) を、比較しやすいように訂正して掲げるものである。漢訳語は、便宜上玄奘による訳語を用いることにする。
- 36) *PAA* の成立の時代については、桜部博士が「俱舎論と同時かややそれに先立つ時代」とされたが (桜部「入阿毘達磨論の研究」pp.167-168)、筆者もそこに説かれる法相の進歩の程度からみて同意見である (前掲拙稿, p.58)。
- 37) cf. 桜部前掲論文, p.168. また, 前掲拙稿, pp.249-244.
- 38) 瓜生津前掲論文 (1), p.64 参照。
- 39) 前註 (36) の瓜生津博士の所論の中に、簡潔には示されているが、ここではより把握しやすくするため一覧表にして整理し、同時に *PSP*(1) の心相応行の箇所に対する簡単な目次にもなるようにした。*PSP*(1) は心不相応行については、相応行法の場合と比較すると、極めて簡略にしか扱っておらず、*PSP*(1) の著者が不相応行法の解説を重視していなかったことを伺わせる。したがっていまは、相応行の箇所の比較のみに止めることにした。なお、比較の便宜上あまりスペースを取らないように、Skt. は最少限に止め、Tib. 語は示さなかった。また漢訳語は玄奘のものを用いた。
- 40) 瓜生津前掲論文 (2), p.186ff.
- 41) 山口博士は、「その「慧」に関する所論を措いては、本論 (= *PSP*(1)) が中観五蘊論でありうる所以の意味は直ちには把握せられないであろう。」と述べておられる。山口前掲論文 (1), P.444. cf. 瓜生津前掲論文 (1), p.76, n.65.
- 42) *PSP*(1), P. ed., 305a7-305b1; p.51, II.3-8.
- 43) *Ibid.*, 286a6-7; p.19, II.13-16. cf. 前註 (21) 参照。
- 44) “atらいけ ākāśāpratisaṃkhyānirodha nirvāṇāny (=pratisaṃkhyānirodha) asaṃskṛtān iti kalpayanti. apare śūnyatāṃ tathatālakṣaṇām asaṃskṛtām parikalpayanti.” (*Prasannapādā*, p.176, II.9-10)

- 45) *PSP*(1), P. ed., 304b1-2; p. 49, ll. 9-14.
- 46) *PAA*, P. ed., Thu 413a1-6. *AKBh*, Pradhan ed., pp. 75-80.
- 47) 前掲拙稿, p. 243 参照。
- 48) 山口博士は, *PSP*(1) の法相が *PAA* のものに近く, *PAA* の法相が有部の古層の法相に類似するというだけの理由で, *PSP*(1) の説が有部の古層の説に依っていると切り切ってはならないと言われるが, (山口前掲 (1), p. 442), まったく同感である。*PSP*(1) が直接 *PAA* を参照した成果であるのか, あるいは, *PAA* の系統の法相的教養を身につけた人物によって著わされたものなのか, その他種々のケースが考えられるが, そういう点については更に検討する余地がある。いずれにしても, *PSP*(1) の法相・法体系は, *AKBh* に代表される後期の有部のアビダルマや, また, *PSP*(2), *Abhidhar-masamuccaya* 等の経量部・瑜伽行派の系統の法相の影響を受けつつも, それらとは明かに異なる, 別系統のアビダルマに基づいて著わされたことは確かである。
- 49) Tsong kha pa: *gSer phreng* (P. ed., No. 6150) Nya 33b4-34a4. 松本史朗「チベットの仏教学について」『東洋学術研究』第20巻第1号, p. 153, n. 16 参照。